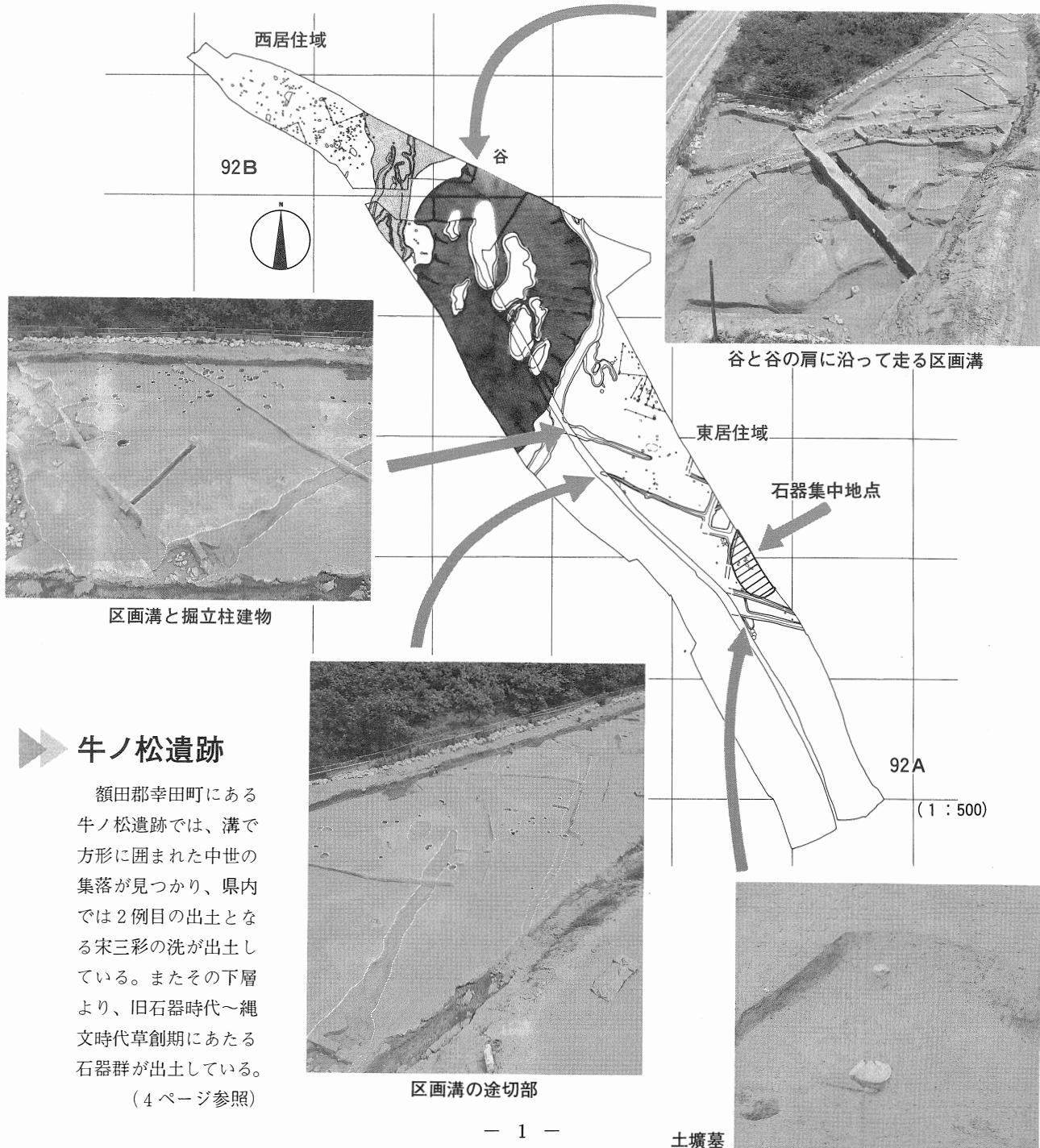


# 埋蔵文化財 愛知

No.30



## 牛ノ松遺跡

額田郡幸田町にある牛ノ松遺跡では、溝で方形に囲まれた中世の集落が見つかり、県内では2例目の出土となる宋三彩の洗が出土している。またその下層より、旧石器時代～縄文時代草創期にあたる石器群が出土している。

(4ページ参照)

## シリーズ「古代を掘る」2

## 尾張国分寺系軒瓦とその周辺

なぜ尾張国府・国分寺が当時の表通りからはずれて、中島郡に設定されたのかは重要な問題である。そしてその謎を解く明快な鍵を我々は今だ持ち合わせてはいない。しかし古代寺院の分布を見てみると、海部・中島郡では極めて多くの寺院跡が確認されており、それらはおおむね2ルートにまどまる。1つは海部海岸部であり、今1つは日光川・三宅川水系である。前者はまさに「東海道」、そして尾張元興寺につながる伊勢湾沿岸の表通りに位置し、後者は尾張国府・国分寺に通じる。

## 尾張国分寺軒瓦の4グループ

尾張国分寺出土の軒瓦は、軒丸瓦が9型式に、軒平瓦が8型式に分類されている(稲垣晋也分類)。これらをここでは組合せとデザインにより大きく4つのグループに分けておきたい。

A群はMⅠ・Ⅱ型式で、軒平瓦は認められない。MⅠは稲沢市東畑麿寺に同型瓦が見られる。

B群は尾張国分寺における軒瓦の主体をなすものであり、「尾張国分寺系軒瓦」と呼ぶことができる。B群はさらに3つに細分する。B1は軒丸瓦MⅢ型式を、軒平瓦ではHⅠ型式。B2は軒丸瓦はMⅣ型式で、軒平瓦はHⅢとHⅣ型式を含めておきたい。B3は軒丸瓦MⅦ・Ⅷ型式と軒平瓦はHⅤ・Ⅵ型式であり、HⅦ・Ⅷ型式は保留しておく。

C群は軒丸瓦MⅤ・Ⅵ型式と軒平瓦HⅡ型式であり、梶山勝氏によりその組合せから奈良大安寺系として新たに提唱されたまとまりである。因みにHⅡ-Aは平城宮6712-Dと同型瓦(梶山1991「尾張国分寺軒瓦とその同型瓦の分布をめぐって」『名古屋市博物館研究紀要』14)。

D群は軒丸瓦MⅨ型式であり、その特徴的なハート型子葉素弁四葉系統の軒丸瓦は海部・中島郡内の各寺院に多用されることになる。

## 矢合「国分寺」創建瓦の2系統

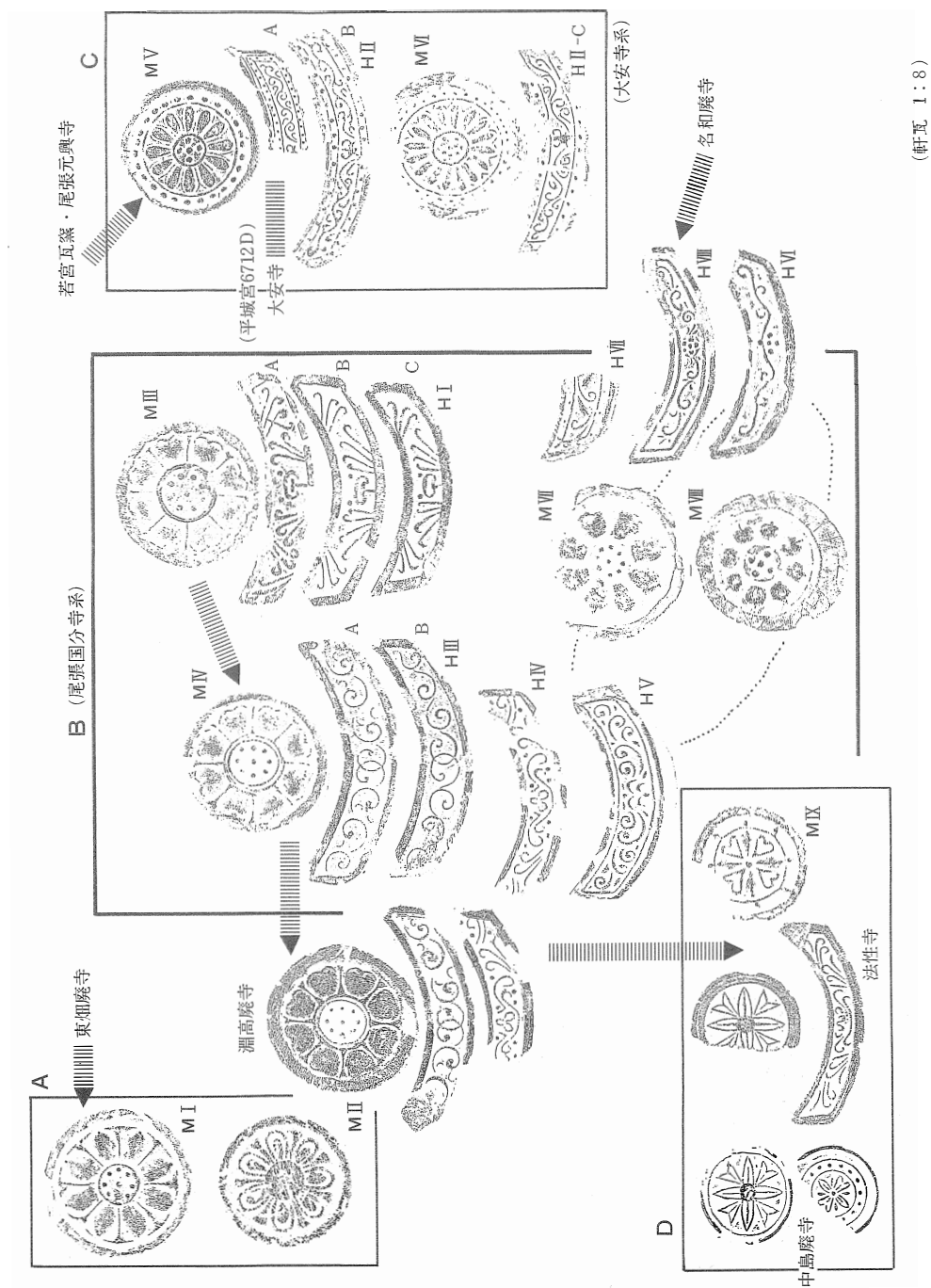
尾張国分寺の発掘調査の成果に基づけば、現在の矢合地内の「国分寺」創建瓦としてはMⅢ

とHⅠ及びMⅤとHⅡ型式の組合せがその代表として推定されている。するとBとC群という2つの系統の軒瓦が使用されていたことになる。B1は軒丸・平瓦とも特徴的なデザインを備えたもので、おそらく矢合国分寺創建にあたって創出された独自のものであり、他に同型瓦が存在しない。一方C群はむしろ名古屋台地部にまどまり、海部郡での採用は認められない。その後の変化と瓦の分布において、B群の海部・中島・愛智郡での圧倒的優位は動かし難い。ところでA群とした型式的にBより先行すると考えられている軒丸瓦の存在は、同型瓦が出土する東畑「国分寺」説・移動説に根強い魅力を残す。

## 軒瓦の系譜

D群とした軒丸瓦MⅨ型式はその特徴的なデザインにより素弁四葉系として仮にまとめると、尾張南部に近似するものが散見できる。その内例えば法性寺・弥勒寺麿寺では軒平瓦として矢合国分寺HⅣ型式系と想定できるものと組合わされ、B2との関連が想定できる。B群ではB1・B3は東畑麿寺を例外とすれば同型瓦が確認されておらず、B2のみ多くの寺院に採用される傾向がある。すると尾張国分寺系とした内では、B2群を媒体として尾張南部の地方寺院及びD群との関係を指摘できよう。A群は7世紀における尾張南部の寺院建立にその系譜がある。B・Dは尾張南部における8世紀後半～9世紀にかけて盛行する系列であり、海部・中島郡内の地方寺院に広く採用される。C群は8世紀中葉における名古屋台地部系とすれば、中島郡における新たな事業への彼の地からの参画を意味するものではなかろうか。中島郡への国府設定は、古墳時代後半期以降続いた小地域間の枠組みの解体を意味していたものかもしれない。

(調査研究員 赤塚次郎)



## 遺跡紹介

## 牛ノ松遺跡

額田郡幸田町

額田郡幸田町大字須美にある牛ノ松遺跡は、東西に流れる須美川によって作られた段丘上にあり、東にむかって入り込む大きな谷地形の西端に位置している。

調査は国道23号岡崎バイパス建設に伴う事前調査として行われ、13,000㎡が調査対象となっている。本文では、全調査区のうち8月までに調査を終了した92A区と92B区のおよそ3,000㎡についての成果を述べていきたい。

牛ノ松遺跡は北に広がる段丘の平坦部に立地し、そのほぼ中央には、南北に走る小さな谷地形がみられる。この谷地形は幅約20mを測り、南にある現存する谷に続いていく。調査時の比高差は、中世の遺物包含層を除いた谷底面と遺構検出面では2～2.5mあった。谷地形は、さらに下層に礫混じりの砂層が堆積しているが、礫が多く掘削が困難であったことと湧水のため全面にわたって調査することができなかった。

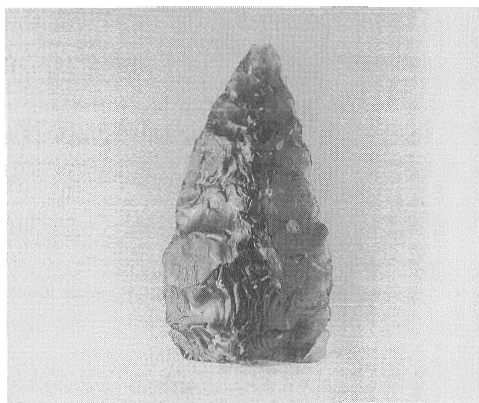
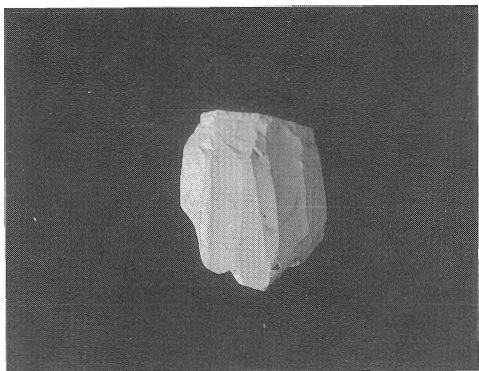
中世における谷の景観は、水流はみられるが谷全幅におよぶような河川ではなく、中洲状になった砂層の高まりの間を小河川が何本も流れていたものと考えられる。また北西側には、いくつかの自然溝を伴う浅い谷が平行して走っている。下層の礫混じりの砂層では土器はまったくみられず、最上部において石鏃や尖頭器・剝片が出土する。ただ、この層の該当する時期については現時点では確定できていない。さらに部分的に行った下層の深掘り調査では、人為的な遺物

は出土していない。

中世（12世紀末～14世紀前半）の牛ノ松遺跡は、前述した小河川の流れる谷を挟んで東と西に居住部分がみられる。東の居住域では谷の肩に沿って走る溝(92A区SD20・92B区SD06)とそこから分岐して谷に直交して直線的に走る溝があり、この直線溝を軸線として、方形に区画された居住域が作られている。区画の溝はほぼ2条1単位となっており、南側では鍵状になった出入口がみられる。西居住域でも、谷と軸線を合わせる方位で掘立柱建物と柵列が作られている。谷の肩に沿って走る溝からは大量の灰釉系陶器の椀・皿、常滑甕、土師器皿・鍋や宋三彩の洗が出土している。さらに、灰釉系陶器の椀と皿・刀子を伴う土壇墓も検出されている。

92A区の南東部において、中世の遺構面である黄褐色砂層の上層より石鏃・細石核・剝片などが100点あまり出土した。この黄褐色砂層は地形に沿うような形で谷にむかって下がっており、石器群もこの傾斜に合わせて北西にいくほど低い位置より見つかった。また、石器の一部は谷と石器集中地点の間の低地部分より出土している。石器群の中には礫や微小剝片はほとんどみられず、出土レベルが傾斜していることから原位置を保っている可能性は少ないが、そのまともりからみてそう遠くない場所に生活域があったと推定される。石器群は細石核と石鏃を含むことから、旧石器時代末～縄文時代草創期にあたりと考えられ、おそらく谷の下層より出土した尖頭器も同様の時期にはいるものだろう。

(調査研究員 宮腰健司)



左 細石核、右 尖頭器

## 田 所 遺 跡

一宮市

田所遺跡は、一宮市の北西部から葉栗郡木曾川町にかけて所在し、木曾川によって形成された標高10m前後の自然堤防上および後背湿地にかけて遺跡の広がりが見られる。発掘調査は、東海北陸自動車道建設に伴うものであり、日本道路公団・愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、(財)愛知県埋蔵文化財センターが、本年7月より来年3月にかけて発掘調査を実施・予定している。調査面積は、7,150㎡である。

発掘調査によって確認しえた遺構・遺物は、大きく以下の4時期に区分することができる。

I期…古墳時代、II期…奈良時代

III期…平安時代、IV期…鎌倉・室町時代

とりわけ、遺構として注目されるのは、I期及びIII期であろう。

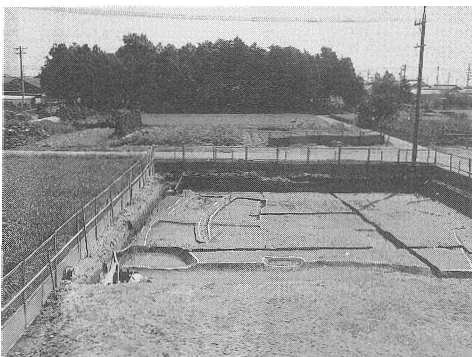
I期の遺構としては水田跡がある。水田跡は13区画検出しており調査区周辺に広範囲にわたって展開している可能性が考えられる。いずれも畦畔によって明確に区画されている。一区画は、東西3～4m・南北5～7mと小規模であり、やや南北方向に細長く延びる長方形の平面形態を呈している。耕作土等より出土した遺物から、古墳時代後期を中心とした水田跡と考えられよう。また、畦畔上に掘削された土坑内より石製有孔円板が出土しており、水田との関連が注目される。

III期では、今回の調査中最も遺構の残存状況

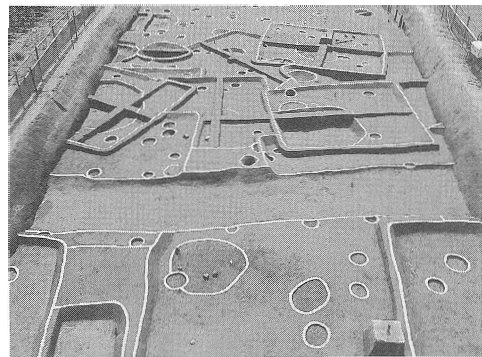
が良好であり、竪穴住居をはじめとした数多くの遺構・遺物を確認することができた。竪穴住居は重複する形で13棟検出しており、時期的には出土した灰釉陶器の年代観より、黒笹90号窯～折戸53号窯式期に比定されたと考えられる。いずれも一辺が5～6m程度の規模であり、方形のプランを呈する。住居の内部構造に関しては判然とはしない部分もあるが、壁面近辺で石・焼土・土師器甕がセットとなる「かまど」状の遺構が認められる住居を4棟確認することができた。また、竪穴住居の周辺には土坑・柱穴群が点在しており、黒笹90号窯式に比定される灰釉陶器とともに残存状況は不良であるが皇朝十二銭の一つ「富壽神寶」が3枚出土した土坑もみられた。

「富壽神寶」は、「和銅開珎」より数えて5番目に鑄造された皇朝銭であり、818年より834年にかけて10万貫文(1億枚)が発行されたとされる。愛知県内においては、かつて渥美郡渥美町貝の浜貝塚において1例採集された報告があり、田所遺跡出土例は2例目のものとなる。しかし、田所遺跡出土例は、発掘調査による出土品であり、黒笹90号窯式に比定される灰釉陶器と共に伴している点が重要である。貨幣は鑄造→流通→廃棄までにある程度の時間差を考慮せねばならないものの、共伴遺物の絶対年代を推定する物差しとしての役割を果たすものである。したがって、今回、田所遺跡より出土した「富壽神寶」は、灰釉陶器の年代観を考える上で貴重な手がかりを与えてくれるものといえよう。

(調査研究員 服部信博)



I 期 水田跡



III 期 竪穴住居群

市町村日より

## 黒笹 45 号 窯

三好町教育委員会

猿投窯黒笹地区には現在、須恵器・灰釉陶器窯 117 基、山茶碗窯92基の古窯跡が確認されている。黒笹45号窯跡は黒笹地区の南西部に属し、逢妻女川水系の開析谷に面する丘陵の南斜面に位置する須恵器窯である。地区内では比較的疎らな分布を示す場所に存在する。古窯は標高約37～41mの南向きの丘陵斜面に営まれており、窯体・物原共に良好に残存していた。

今回の発掘調査は土地改良事業にともなう調査の一環として、平成4年7月から8月にかけて実施した。窯体は、天井部は崩落するものの、舟底状ピットを有する窖窯で、床面プランで全長8.38m、床面最大部巾1.35m、床面傾斜角27°を計測した。物原は、窯体前方斜面に短軸12.5m×長軸16.4mの扇形に広がり、客土の下には厚いところで約0.7mの黒灰層を検出した。

遺物は、窯内・舟底状ピット内・灰原等より

## 善光寺沢遺跡

吉良町教育委員会

善光寺沢遺跡は幡豆郡吉良町大字岡山字山王山地内に所在する中世墓群である。丘陵の南東斜面上(標高34～45m)に営まれたこの遺跡は、中世の墓地として古くから知られてきた。

今回の発掘調査は土取工事に伴うもので、平成4年5月11日から8月15日にかけて実施した。調査面積は3,000㎡を数え、遺構の保存状態は悪かったものの70基以上の中世墓と土坑多数を検出した。

墓地は14、15世紀を中心に営まれ、墓には三つの形式が認められた。第1は角礫で四角く囲って蔵骨器を納めているもので、正方形に近い形と長方形に近い平面形とがみられる。角礫で囲った蔵骨器の上には扁平な円礫が積み上げられており、恐らくは五輪塔が据えられたと考えられる。第2は単独で蔵骨器を納めているもので、第3は常滑焼の甕を利用した集合葬とみられる形式である。



出土し、器種は杯蓋〔A〕・杯〔A・B〕・碗〔A・B〕・盤〔B〕・高盤〔A〕・鉢〔A〕・鉄鉢・甕〔A〕・長頸瓶・水瓶(浄瓶)・広口短頸壺(蓋)・小壺等である。詳細は略すが本窯跡は、猿投窯編年鳴海32号窯式期を中心に一部折戸10号窯式期前半に位置付けられ、年代は8世紀中葉から後半に比定されるものである。この時期猿投窯では、瓶・壺類を中心に、いわゆる原始灰釉陶器の焼造に成功しており、黒笹地区の窯業生産の発展過程を明らかにする該期の良好な一括資料を得たものといえよう。

(安田幸市)



調査区のほぼ中央には岩盤が露呈しており、それより北東側では少なくとも3段以上の連続する平坦面を造り出して墓地が構成されている。

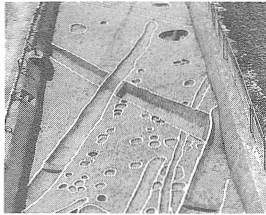
蔵骨器には、古瀬戸や常滑の壺・甕が用いられ、その多くは底に穿孔がみられた。また古銭や陶丸も出土しており、それらは墓への供献品と考えられる。

その他、尾根部分から弥生後期の土器棺、6世紀ごろとみられる古墳も検出されており、昭和62、63年に調査した中根山遺跡との関連性についても検討課題となっている。

(荻野 栄)

# 発掘調査ニュース

## 西上免遺跡

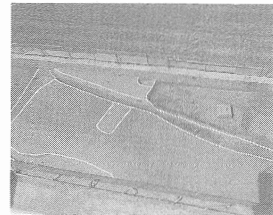


下面遺構

今回の調査は、調査面積 260㎡ と小規模であり、既に調査は 5 月をもって終了している。確認しえた遺構・遺物は大きく鎌倉時代後半と奈良時代に分かれ、前者の遺構には規則的に配置された土壇群及び溝等、後者の遺構としては溝 1 条を確認している。

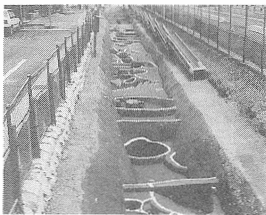
(調査研究員 鬼頭 剛)

## 一宮市



上面遺構

## 清洲城下町遺跡

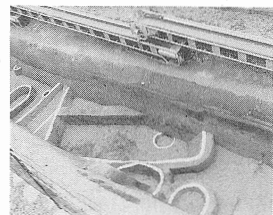


B区全景(西から)

A・B区では、江戸、城下町後期、前期の遺物が出土し、多数の土坑、井戸を検出した。さらに、B区で奈良～平安期の竪穴住居を確認した。また、SK39で、城下町遺跡では初めての出土の李朝刷毛目茶碗を含んだ城下町前期の良好な一括資料を得ることができた。

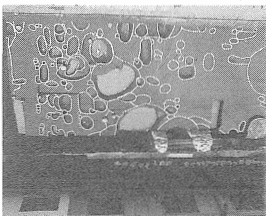
(調査研究員 大竹正吾)

## 清洲町



SB01 竪穴住居

## 外町遺跡



B区下面調査区西半

今年度の調査区も、昨年度同様大きく居住域と田地に分けることができた。居住域では、江戸時代後期（18世紀末～19世紀）の土坑・井戸以外に、江戸時代中期（17世紀末～18世紀）の柱穴群や礎石群を検出しており、より古い建物群や柵列の存在が確認された。

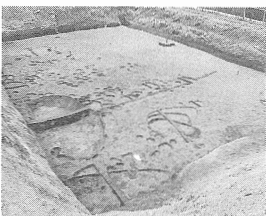
(調査研究員 小嶋廣也)

## 新川町



SK167 遺物出土状態

## 貴生町遺跡



B区西半部全景

貴生町遺跡は朝日遺跡の東約 1km の微高地上に所在している。古墳時代前期に属する土坑・溝のほか、近世の自然流路・土坑・溝などが見つかっている。特筆すべき遺物として、両面に線刻で紋様をほどこした滑石製の有孔円板が自然流路から出土している。

(調査研究員 樋上 昇)

## 名古屋市



C区NR01

## 子持古窯跡



窯 体

子持古窯跡は西加茂郡三好町字子持松に所在する 13 世紀前半の古窯跡。窯体 1 基、前庭部から土坑 2 基、排水溝 1 条、前庭部下方から粘土だめの土坑 1 基、灰原下方の谷部から大型の長方形土坑 1 基等が検出された。

(調査研究員 小澤一弘)

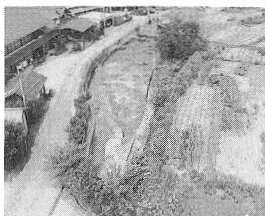
## 三好町



前 庭 部

## 坂口遺跡

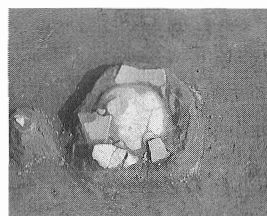
旭町



全 景

坂口遺跡は、東加茂郡旭町大字池嶋字坂口に所在。遺跡は、矢作川左岸、標高約 114 m の河岸段丘上に立地し、昨年度に引き続き調査。遺構は明瞭に検出し得なかったが、黒褐色極細粒砂の包含層からは、縄文早～晩期と思われる土器、石器が多数出土している。

(調査研究員 松田 訓)



縄文土器出土状況

## セ ン タ ー 日 誌

## 埋蔵文化財展

清洲町民センター(西春日井郡清洲町)

7月25日～8月9日(14日間)入場者数1,210名

## 埋蔵文化財講演会

清洲町民センターホール

8月9日(日)

網野善彦(神奈川大学短期大学部)

「日本社会再考」 入場者数 250名

## 清洲城下町遺跡見学会

8月2日(日) 参加者数 190名

## 埋蔵文化財基礎研修会

愛知県埋蔵文化財調査センター

8月27日(木)・28日(金) 参加者数 33名

## 現地説明会

8月1日(土)

牛ノ松遺跡(幸田町) 参加者数 250名  
中世の集落跡。下層からは旧石器が出土。

## 来訪者

|      |                                |      |
|------|--------------------------------|------|
| 4/ 7 | 岐阜県文化財保護センター                   | 2名   |
| 4/22 | 三好町教育委員会                       | 2名   |
| 4/24 | 蒲郡市博物館 小笠原久和氏                  |      |
| 4/28 | エフエム愛知 本多静雄氏、<br>愛知県弥富農業技術センター | 7名   |
| 4/28 | 名古屋市博物館 野沢則幸氏他                 | 2名   |
| 5/ 1 | 十四山西部小学校                       | 32名  |
| 5/13 | 桜小学校                           | 152名 |
| 5/14 | 足助町教育委員会 鈴木茂夫氏他                | 2名   |
| 5/19 | 愛知県農林年金受給者連盟 河合琢二氏             |      |
| 5/25 | 上田市立信濃国分寺資料館<br>川上 元氏・倉澤正幸氏    |      |
| 5/28 | 新潟県教育庁 神田久夫氏他                  | 3名   |
| 5/29 | 愛知県社会教育委員連絡協議会                 | 120名 |

|       |                    |     |
|-------|--------------------|-----|
| 6/17  | 京都大学霊長類研究所         | 6名  |
| 6/19  | 桑名市教育研究会           | 20名 |
| 6/22  | 三重県埋蔵文化財センター       | 2名  |
| 6/24  | 愛知県教育サービスセンター      | 2名  |
| 6/26  | 日本たばこ産業K.K.        | 11名 |
| 6/30  | 田原町教育委員会           | 2名  |
| 7/ 1  | 大阪文化財センター          | 3名  |
| 7/ 4  | 愛知県小中学校校長会         | 27名 |
| 7/ 9  | 岐阜市歴史博物館 土山公仁氏     |     |
| 7/17  | 知立東高校              | 50名 |
| 7/23  | 豊明市教育委員会           | 3名  |
| 8/11  | 稲沢歴史研究会            | 25名 |
| 8/12  | 奈良国立文化財研究所 光谷拓実氏   |     |
| 8/18  | 海部農業改良普及所          | 24名 |
| 8/20  | 津島北高校 濱嶋 眞氏他       | 8名  |
| 8/26  | 貝殻山貝塚資料館 野口哲也氏     |     |
| 9/3・4 | 弥生の石器を見る会          | 10名 |
| 9/ 9  | 瀬戸市埋蔵文化財センター 藤澤良祐氏 |     |
| 9/22  | 弥生文化博物館 広瀬和雄氏      |     |

## 埋蔵文化財愛知 No.30

発行日 平成4年10月1日  
編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター  
発行 〒498 愛知県海部郡弥富町  
前ヶ須新田字野方802番24  
TEL 0567-67-4161～4163  
印刷 株式会社 クイックス